



日本マンドリン連盟本部会報
(JAPAN MANDOLIN UNION)

1991年
4月1日

No. **110**

〒168 東京都杉並区高井戸東3-4-11

日本マンドリン連盟本部事務局

電話 東京 (03) 3334-6962
振替 東京 1-211
銀行 第一勧業銀行浜田山支店
普通口座 1031764

◎第22回定時会員総会報告

第22回定時会員総会は1991年3月2日(土)午後1時30分から、東京・飯田橋会館において理事会兼常任理事会と同時に開催されました。

(出席者) 伊東尚生、島 重信、中野二郎、西村鏡次郎、九島勝太郎、稲垣池嘉子、高橋五郎、熊谷公子、市毛利喜夫、富田 宏、荻原正弘、中川信良、荒井満喜子、杉原里子、岩片順子、谷岡 研、高橋保夫、高山津図武、岡本明久、田中倭文子、小坂橋靖夫、斉藤総子、山本一俊、小関洋一、池田 宏、本田健二、前田和彦、森下卓也、高城逸朗、清正 寛、児玉 久

(物故者への黙祷)

故・近藤晃弘 1990年6月13日 80才 心不全

故・稲垣 実 1990年6月13日 63才 心不全

故・ジークフリート・ベーレント 1990年9月20日 56才 心不全

1. 第22期(1990年度)事業報告……承認

- 本部会報発行 (No. 103~No. 108)、添付楽譜 (No. 70~No. 75)、偶数月
- 会員名簿 (3月)
- JMU REVIEW (No. 15) 6月
- 第21回定時会員総会 (3月17日、大阪市立労働会館)
- 常任理事選任 関西支部長 森下卓也、九州支部長 清正 寛
- 顧問委嘱 近藤晃弘、落合浩一、小林啓一郎、児玉 久
- 表彰 小林啓一郎、市川 昇、市毛利喜夫、落合浩一
- マンドリン座談会 (3月18日、大阪市立労働会館)
- 第12回日本マンドリン独奏コンクール (10月28日、名古屋市・今池ガスホール)

2. 第22期(1990年度)決算報告……承認(別紙1の収支計算書のとおり)

3. 第23期(1991年度)事業計画……承認

- 本部会報発行 (No. 109~No. 114)、添付楽譜 (No. 76~No. 81)
- JMU REVIEW (No. 16) 6月
- 第22回定時会員総会 (3月2日、東京・飯田橋会館)
- 本部役員選任・顧問委嘱(別紙2のとおり)
- 表彰 常任理事・前東北支部事務局局長 高橋五郎(1943年9月6日生)

「武井文庫」の記憶を辿って（前号のつづき）

足立直子

疎開先の南多摩村の仮住いから、やがて、姉の嫁ぎ先である東京渋谷区羽沢町に移りました。先方の好意で、焼け残った大きな家の二階の一部に住まうことになったのです。ラジオ放送は盛んに米軍のジャズを流しており、不自由ながら、最低の食料は手に入るようになっていました。そこから父は役所に通い、私は学校に戻って、手狭な仮校舎で勉強を始めました。

昭和21年、鎌倉に移りました。鎌倉市小町のその家は、駅から八幡宮の方へ5分ほどで右に折れたところで、滑川のそばでした。鍋島本家の鍋島さんと父が、職場で一緒だった関係で、その別邸に住まわせていただくことになったのです。私どもの住むのはその母屋の部分で、離れには他の家族がおり、そのまた向うには他の家族が住むというような状態でした。戦災以来親類に預けていた祖母を引き取って、父と母、私の4人に、年取った女中が一人ついてきて計5人が住みはじめました。父がいつも座っていたのは、二階の八帖の座敷でした。この部屋には南側に畳敷きの広縁があり、その一隅がちょっと広くなっていて、襖で仕切られ、小部屋のようになっていました。譜面などはそこに積まれていました。明るい場所でしたが、つまりは軒先というか、廊下の隅でありました。この家はもう随分といたんでおり、雨戸もスキスキで、手入れのしようもないほどになっておりました。

当時はまだ世の中も殺伐としていました。新円切り替えとかで、家計は益々逼迫し、焼け残りの品々の売り食い生活でしたが、それは周りの人々も同じことで、それほど気になることはありませんでした。父はそのころ宮内省を辞し、藤沢にあった東洋醸造という会社に勤務しておりました。もともと、祖父の関係していた会社で、江の電一本で通うことが出来ました。

鎌倉は当時、東京よりも文化の匂いがしていました。町が焼けなかったということもあり、在住の文化人たちの活動もあったと思いますが、音楽会やダンスパーティが頻繁に開かれていました。困窮の中で、父は私を暖かい目を注いで見守ってくれました。私が誘われて入った素人合唱団は、オルゴール合唱団と言い、毎週の練習はほんとうに楽しいひとときでした。父は乞われてその指揮もとることになり、その合唱団のために作曲したのが、高田三九三作詞の「秋三題」でした。これはNHKのラジオからも流れましたし、後に父の葬式のおりに、庭に並んだ合唱団の方々がこれを歌い続けて、父を送ってくださったのでした。

時代も悪かったと思いますが、その頃姉が入院生活となり、結婚直後であった私も同じ病気でこの家に引き取られての療養で、両親にとってまことに辛い日々となりました。長兄である父は、多くの弟妹の面倒も見ていました。父にとって、武井文庫に見入り、作曲をすることだけが、やすらぎのひとつであった時代でした。中野二郎氏、アルモニアの沢口氏など、音楽を通じての方々との手紙のやりとり、曲譜のやりとりに情熱を燃やしていました。それが唯一の父の慰めでした。父の深い吐息と、痩せ衰えた身体を病床から眺めながら、私も暗い療養の日々を送っておりました。

その部屋は三方が窓で、明るい居心地の良い部屋でした。畳の上にあぐらをかいて、すうすうと風に吹かれながら、ラコートを片手に、父は作曲をしておりました。ワイシャツの胸もとから、肋骨の浮く胸を覗かせて、フンフンと鼻歌のように口ずさみながら、ギターを爪弾いていました。独奏曲の場合などまことに難しく「……というのだが、どう思う？」と聞かれても、返事のしようがないくらい、父の下手な弾き方ではさっぱりわからないのでした。曲の名前をつけるのも大変で、

私の歳時記を繰っては、考えこんでいたりもしました。

あの台風がきたのは、昭和24年、父の亡くなる年のことでした。戦後はじめての大型台風だったと思います。

私は二階のひと間で病臥中、父は階下で寝こんでいました。夜中に風雨が強まって、雨戸をゆるがせ、その吹くさまが益々強くなり、雨がひどく漏ってきました。広縁の一隅にある武井文庫の上にも、雨の注ぐ音がしました。私はとうとう父を呼びに下におりました。「雨が漏ってる」と申しますと、父はやっと起き上がって二階にきました。そして、ポチポチと無事な座敷へと楽譜を運びはじめたのです。力のない身体で、少しずつ、少しずつ、運びました。私はただじっとそれを見つめているだけだったのです。疲れ切った父は「…もう良い…もう良いよ…」と細い声で言い、運ぶのを止めようとしてました。私は「折角、戦災にも助かったのだから…」と申し、父はまた、のろのろと運びはじめて、どうやら全部を部屋に移し入れたのでした。その頃の父の身体は、今考えるとすでに相当弱っており、その作業をするのが精一杯のことだったのだらうと思います。座敷の真中に、楽譜が積み上げられて一夜が明けたのでした。

父が、武井文庫を整理しその総目録を作りはじめたのは、この鎌倉時代のことだったと思います。まだワープロなどありませんから、父は中古の英文タイプを手に入れてきて、それで丁寧に打ったのです。ポチン、ポチン…と父の打つタイプの音が、終日その二階に響いていました。曲目、見出しなど殆どは外国語、イタリー語であったと思います、表紙には、手書きの横文字を記し、克明に整理しました。これを「正」とし、「副」としてもう一部を作るのに、コピー機器はありませんから、またまた「ポチン、ポチン…」なのでした。当時は手書きの楽譜も作ってありました。ケント紙のようなものに、インキで五線を引くことから始めるわけですが、フッとずらした物差しが、すっとインキを引いて汚れてしまうのはしょっちゅうで、一枚の五線を引くのに、大変な努力が必要なのでした。

父が亡くなりましたのは、昭和24年12月14日でした。その4日ほど前に合奏の練習に出かけた父は、帰宅途中の横須賀線の中で気分が悪くなり、その後が誤診であったのかもしれませんが、緊急入院した近くの病院で手術をし、心臓が弱ってそのまま亡くなりました。私はまだ伏せていたのですが、夫が走ってきて、病院に参りました。が、父はもう、手先から冷たくなりはじめていたのでした。最後のひと時の間中、「僕が今、死んでは困るのだ…」と看護婦さんに訴え続けていたという父の心は、悲しいばかりでございます。

父の死後、当時の OST の理事であられた松谷五郎、島 重信、兼藤栄氏らの手によって、武井文庫の整理が始められました。当時、まだ私は、その隣室で伏せていた状態でしたが、とにかく、すべてを運び出すということになり、私の枕もとには、ラコートと、手書きのギター曲集一冊が残されたのでした。父の購入した楽器と譜面台など、すべてを当時の OST に差し上げるということで、我が家の中から武井文庫は消えたのでした。

このたび、現在までの所有者であられた、杉田、河合御両家御遺族の御寛大な御処置によって、父の守り抜いた武井文庫が、この上なく素晴らしい落ち着き先を得て、将来音楽を愛する方々のお役に立つ日もくるというお知らせをいただきました。ここに至りましたのは、これに携わってくださった多くの方々の、暖かい御尽力によるものでございます。父が、どんなにか安堵し、喜んでおりますこととごぞいませう。1990年、父の生誕百年にあたるというこの年の夢のように嬉しい、有難いお話でございます。(おわり)